

「エルサレム神殿の崩壊予告」

2015年11月03日

ルカによる福音書 21 章 5 節～7 節。ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」

右の写真は第二エルサレム神殿の復元模型である。見るからに、荘厳で堅固な神殿である。この神殿は紀元前 20 年頃にヘロデ大王が再建したものである。



紀元前千年頃、ダビデ王が神殿を建てようとしたが、彼は戦争で手が血塗られているので、許されなかった。ダビデの子ソロモン王が財力と人力を尽くして建てた。イスラエルの人々にとって「契約の箱」が安置

された神殿は魂の故郷であった。神が臨在する神殿に集い、魂を注ぎ出して祈りを捧げ、神の恵みと祝福に与ってきた。しかし、小国だったイスラエルは他国の支配を受けることが多く、神殿の栄光を見たのはわずかで、戦乱に巻き込まれ、侵略による悲惨を体験する場であった。イスラエルの歴史を刻み込んだ悲劇の神殿と言えよう。

紀元前 37 年、ヘロデはローマ皇帝から信任され、ユダヤの王となった。彼は専制政治を行い、ユダヤ国を拡大強化した。大都市建設をはじめ、幾多の建造物を建てたが、第二エルサレム神殿を自分の名を永遠に留めようとするかのように、精魂込めて建てた。古代建築の中で最も壮麗と言われる神殿である。優れた建築に見慣れたローマ人でさえ、一度はエルサレム神殿を見たいと思わせるほどの大神殿であった。神殿はユダヤ人にとって魂の故郷であったが、同時に、ローマの属国である屈辱を晴らす誇りでもあった。

ルカ福音書は「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話している」と書いているが、マルコ福音書 13 章 1 節の並行記事では「イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。『先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう』」と、弟子が神殿の荘厳さに感嘆したと記している。マルコの伝承が正しいと思われる。弟子の感嘆の言葉に対し、主イエスは「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る」とエルサレム神殿の崩壊を予告された。この大神殿が崩壊することなど、弟子たちには考えられないことであり、また、あってはならないことでもあった。しかし、主イエスはいつも容易く、神殿崩壊を予告された。

仏教用語に「形あるもの必ず滅す」という言葉がある。どんなものでもいずれ「無常」の流れの中で壊れていく。世の常である。弟子たちはエルサレム神殿が崩壊する時は、世の終り、終末の時であると思った。彼らは恐れて「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか」と尋ねた。弟子たちの問いに答え、主イエスは終末について語っている。(続く)